

国際アーサー王学会日本支部 2023年第37回年次大会発表要旨

研究発表 1

J.R.R.トールキンのガウェイン像——“ofermod”と“chivalry”に着目して 岡本広毅（立命館大学）

J.R.R.トールキンにとって円卓の騎士ガウェインは特別な存在であろう。彼の最初の目覚ましい研究業績は、リーズ大学時代に同僚 E.V. Gordon とともに編纂した校訂本 *Sir Gawain and the Green Knight* (1925 年、以後 SGGK) だった。本作のファンタジー創作への影響はこれまでも指摘されている。本発表では、古英語叙事詩『モールドンの戦い』(10 世紀)に関するトールキンの論考『ベオルフトヘルムの息子ベオルフトノスの帰還』(1953 年、以後『帰還』)を起点に、その中で言及、称賛されるガウェイン像について掘り下げる。『帰還』の議論で要となる古英語の語彙“ofermod”(勇気・誇り/驕り)の分析、それと奇妙に置き換えられる“chivalry”(騎士道)の用法を踏まえることで、トールキンのガウェイン像あるいは SGGK 解釈を深められるのではないか。『帰還』と同年に行われた SGGK に関する講演、現代英語訳、そして『ブルート』年代記の枠組みを取り入れた短編小説『農夫ジャイルズの冒険』なども含めて検討したい。

研究発表 2

イゾルデの父はなぜ「アフリカ生まれのグルムーン」なのか？ 一條麻美子（東京大学）

ゴットフリート作『トリスタン』において、イゾルデの父であるアイルランド王は「豪胆王グルムーン Gurmûn Gemuotheit」という名を与えられ、アフリカの王族であり、進取の気性をもって故国を出奔し、アイルランドにたどり着いて王となったとされている。一方で彼は、他のトリスタン物語と同様に、モーロルト・エピソードにおいても、竜退治のエピソードにおいても、重要な役割を振り当てられることがない。ゴットフリートはなぜ、脇役に過ぎないイゾルデの父に、名前と輝かしい来歴を与えたのであろうか。

この人物の由来については諸説あるが、ゴットフリートの聴衆/読者が「アフリカ生まれのアイルランド王」という記述から連想したのは、まず第一に『ブリタニア列王史』第 11 巻第 8 章に登場する「ヒベルニアにいるアフリカ人たちの王ゴルムンドゥス」であったと思われる(アイルランド、アフリカ、名前の共通性)。そうであれば、ゴットフリートは『トリスタン』の時間枠を、アーサー王死後の世界に設定しているということになる。本発表では、俗人本系(アイルハルト)の物語と異なるこの時代設定が、ゴットフリートの作品解釈にもたらす意味を考察する。

研究発表 3

『トリスタン』の作者性を巡る近年の議論について

渡邊徳明（日本大学）

1210年頃にゴットフリートが書いたとされる『トリスタン』は、作者名がテキスト中に明示されており、その意味では作者自身の思想を反映した作品と思われやすい。

ところが、それ自体、後代に書かれた写本を更に近代の学者が校訂したテキストに基づく理解という意味で「フィクショナル」ではないか、という見方もある。

理論的・観念的な作者論が多いドイツの中世文学研究では、個人/集団、テキスト内/テキスト外、創作/伝承、自由/強制、記述伝承/口頭伝承、知的エリート/世俗的な受容者、といった二項対立的なテーマ設定で叙事詩を論じることが多い。

特に今世紀始め以降、作者と受容者の身体感覚の共有と表裏の集団的な心性についての議論が高まった。更にその後のデジタル化の進展もあり、権威的(でフィクショナル)な「個の作者」の営為はますます相対化され、統一的な校訂テキストではなく、伝承における個々の写本について、個別に創意が論じられるようになってきた。

このような状況において、統一的な「作品」を読むとは、どういうことなのか、そこに描かれる人物の行動・言動に読み取られる精神は、個人と集団のどちらに由来するのか、などなど、様々なレベルの再考が求められている。本発表では、このような近年の作者性についての議論が、どのように『トリスタン』をめぐる為されているかを『ニーベルンゲンの歌』とその研究も引き合いに出しながら考察する。

情報交換フォーラム 3つのアーサー王もの舞台

2023年はアーサー王関係者にとり、センター試験にアーサー王が出題された年以来の嬉しい驚きの年となった。東京で1月から10月（大阪では11月）にかけて3つもの商業舞台でアーサー王のミュージカル作品が上演されたのである。

1月はホリプロによる『キング・アーサー King Arthur』、7月は宝塚宙(そら)組による『エクスカリバー Xcalibur』、10月は松竹の『キャメロット Camelot』がそれぞれ上演された。いずれも海外作品の移植であるが、日本上演にあたり独自の演出がなされてどれも見応えのある舞台となった。

『キング・アーサー』は長くミュージカル不毛の地と言われていたフランスで生まれたロック調の作品、『エクスカリバー』は韓国オリジナルと謳ってはいるが、元々はスイスのザンクト・ガレン劇場の為に世界的に知られるミュージカル作曲家ワイルドホーンによる曲で2014年にドイツ語で作られた作品である。『キャメロット』についてはミュージカル映画にもなり、J.F. ケネディ大統領が愛した作品として知られる。

この3つの作品についてご紹介したい。

(小路 邦子)